

***The Last of the Mohicans* のテーマ：  
政治と宗教**

肴 倉 宏

**The theme of *The Last of the Mohicans* :  
Politics and Religion**

Hiroshi Sakanakura

抄 録

自然とそれを覆う闇は、*The Last of the Mohicans* を構成する重要な要素であるだけでなく、作品のテーマを支える重要な意味をも与えられている。自然と闇は、それぞれ、善と悪を象徴的に示している。貴族制社会を象徴する砦は、砦の司令官たちが悪に支配されているために崩壊する。Duncan Heyward は、合理主義・博愛主義的キリスト教信仰をもっている民主々義者である。しかし、彼の民主々義は、Magua を悪の化身と理解できないために挫折する。Natty Bumppo の登場は、大衆が導く民主々義の台頭を象徴的に示している。Natty Bumppo の民主々義は、キリスト教信仰の新しい理解に支えられている。*The Last of the Mohicans* のテーマは、政治と宗教の係わりである。

キーワード：ジェームズ・フェニモア・クーパー、「モヒカン族の最後の者」、ナッテー・バンポー、政治と宗教

(1996年8月31日 受理)

**Abstract**

The contrast between nature and the darkness covering it constitutes both structural and thematic frames for *The Last of the Mohicans*. Nature symbolizes good while the darkness symbolizes evil. The fortress symbolic of aristocracy collapses because the commanders of the fortress are controlled by evil. Duncan Heyward is the democrat who has a rationalistic and philanthropic Christian faith. Duncan's democracy, however, fails because he does not understand Magua as an evil person. The appearance of Natty Bumppo symbolizes the rise of democracy led by common men. Natty Bumppo's democracy is based on a new understanding of Christian faith. The relation of politics and religion is the theme of *The Last of the Mohicans*.

**Key words:** James Fenimore Cooper, *The Last of the Mohicans*, Natty Bumppo, politics and religion

(Received August 31, 1996)

*The Last of the Mohicans* (1826) は、これまで重要なテーマを持たない作品とみなされてきた。例えば、Yvor Winters は、次の様にいう。

The best single plot of adventure in Cooper is beyond a doubt that of *The Last of the Mohicans*, but. . . the book nowhere rises to a level of seriousness.<sup>(1)</sup>

Winters は、冒険物語としては最高の作品だが重要な意味を投げかけていない作品であると批評している。彼は、*The Last of the Mohicans* を単なる冒険物語と見ているのである。しかし、物語の中心人物 Natty Bumppo を闇に覆われた舞台の中で捕らえ直してみるとどうなるであろうか。闇に覆われた舞台の中で Natty Bumppo を捕らえ直してみると、そこには象徴的な意味を与えられた新しい人間像が浮かび上がるだけでなく、新しい Natty Bumppo 像を通して作品のテーマも浮かびあがってくるように思えるのである。そして、*The Last of the Mohicans* の最初の3章は、重要な意味をもって来るように思えるのである。

Cooper は、最初の3章で Natty Bumppo に与えた意味を明らかにするために必要な準備をしている。まず重要なのは、物語の舞台を設定することである。雄大な自然が読者の眼前に展開する。Cooper は、第1章の冒頭で自然との戦いが敵対するもの同志の戦いに先立つと述べている。続いて、Cooper は、対決する英・仏両軍の大部隊が広大な森林に飲み込まれている様子を描いて “the forest... appeared to swallow up the living mass which had slowly entered its bosom.” (15)<sup>(2)</sup> と述べている。敵・味方両軍を飲み込んでしまう自然の広大さが強調されているのである。

Cooper は、自然の物理的な広大さを強調するだけでない。彼は、自然が象徴的な意味も与えられていることを示そうとする。Howard Mumford Jones は、Cooper のパノラマ的な自然描写が Hudson River School に属すると言われている画家たちの自然描写と共通していることを指摘した上で、両者が描こうとしたことは、“the grandeur of God working in the universe”<sup>(3)</sup> であると述べている。Cooper は、神が自然を通して自らを啓示するということを示そうとしたのだ。従って、Cooper の描く自然は、それを見る者の心の中に “the awe or humility”<sup>(4)</sup> をもたらすものなのだ。Cooper の描く舞台を構成する自然は、宗教的な意味を持つ信仰の対象とされるものなのである。

神の啓示としての Cooper の自然は、同時に作品の舞台を構成するもう一つの重要な要素である死と闇の覆うところでもある。それは、英・仏両軍が植民地支配の覇を競いあって死闘を繰り広げている “the bloody arena” (12) でもあるのだ。そして、死体が累々と続く森林地帯は、闇に包まれている。Cooper は、森林地帯を “an impervious boundary of forest” (11) や、“the interminable forests” (13) と描き、森の中は光を通さず昼なお薄暗いという。Cooper の作品には、物語が夕方から始まって夜へと進むものが多い。*The Last of the Mohicans* でも冒頭の残照がすぐさま夜の闇にかき消されてしまうことで、森の中はより一層暗さを増す。この点について、Thomas Philbrick は、“almost always Cooper’s protagonists are hemmed in by darkness, mist, or the cover.”<sup>(5)</sup> と述べている。闇に包まれ死体の転がる森は、まるで墓場のような不気味な様子をしているのである。

Cooper は、死臭を漂わす闇を一人のインディアンと結び付けて描いている。読者は、このインディアンの名前が Magua であると知らされるのだが、彼は物語が始まるとすぐに大自然の舞台に登場するのである。夕暮れに Edward 砦に “the unwelcome tidings” (17) をもって現れたこのインディアンは、これからすぐに訪れる不吉な闇の前触れなのである。Cooper は、この男と闇の結び付きを強調する。この男の表情は、闇のように暗い。そればかりか、Magua の表情の暗さは、見る者にただならぬ嫌悪感すら与えている。Cooper は、彼の表情を次のように描いている。

The colours of the war-paint had blended in dark confusion about his fierce countenance, and rendered his swarthy lineaments still more savage and repulsive, than if art had attempted an effect. (18)

Cooper は、Magua の暗さが顔にぬった絵の具の効果だけによるものではないという。こうして、Cooper は、Magua の表情に浮かぶ暗さがこの男の本質に根ざしていることを暗示している。

Cooper は、物語の進行につれて Magua の本質を読者に明らかにする。そして、彼は舞台を包む闇の性質を明らかにしてゆくのである。Magua は、倫理的に墮落したインディアンとして描かれている。彼は、白人と接触し “the fire-water” (102) を飲むことを覚え、“a rascal” (102) になり下がったのだ。文明と接触し宗教的な意味を与えられている自然との関係を失ったことが、彼の墮落の原因なのである。やがて、Magua は、大虐殺を引き起こした首謀者として読者の前に現れる。第17章の William Henry 砦の虐殺の場面は、イギリス軍の将兵とともに婦人や子供までがインディアンに殺された歴史的に有名な事件である。Cooper は、この事件と Huron 族を結び付ける。Huron 族が大量殺戮を行ったのだと言う。そして、Cooper の Magua は、Huron 族を操って彼等にイギリス軍の将兵と婦人や子供を襲撃させ虐殺させたのである。森林地帯に転がる死体は、血に飢えた Magua の暗躍の結果なのである。Magua は、“the dusky savage the Prince of Darkness, brooding on his own fancied wrongs, and plotting evil” (284) なのである。Magua は、悪の化身なのだ。大自然という舞台は、倫理的腐敗を隠蔽し悪の跳梁を許す象徴的な意味を帯びた闇に覆われているのである。

Cooper は、まず初めに物語の舞台を設定した。宗教的な意味が与えられた自然は、背後におしやられその表面を倫理的腐敗を隠す闇が覆っている。Magua が君臨する舞台は、James Franklin Beard がいうように “his [man's] fallen state”<sup>(6)</sup> なのである。こうして、Cooper は、これから闇に覆われた舞台で起こる事柄にまつわる問題の中心が悪の認識に関するものであることを暗示するのである。

倫理的腐敗を隠し悪の跳梁を許す闇に覆われた舞台の上に最初に見えてくるのは、砦なのである。読者は、第1章でイギリス軍が New York 植民地に Edward 砦と William Henry 砦を構築しイギリスの植民地を脅かそうとしているフランス軍と対峙していることが伝えられる。砦は、戦略的拠点として重要であるだけではない。それは、象徴的な意味も与えられているのである。第16章の Munro 一族の再会の場面は、砦に与えられてい

る象徴性を暗示している。Cooper は、離れ離れになっていた Munro と娘たちが砦の中で再会している様子を次のように描写している。

Not only the dangers through which they [Munro and his daughters] had passed, but those which still impended above them, appeared to be momentarily forgotten, in the soothing indulgence of such a family meeting. It seemed as if they had profited the short truce, to devote an instant to the purest and best affections; the daughters forgetting their fears, and the veteran his cares, in the security of the moment. (156)

Munro と娘たちは、フランス軍に包囲され陥落寸前の William Henry 砦の中でそれぞれの心配や恐怖を忘れ再会した喜びを味わっている。彼等は、陥落寸前であるとしても砦が存続するかぎり幸福感に浸ることができるのである。砦は、その中にいる者に幸福の享受を保障する人工的な構築物なのである。砦は、幸福の追求を可能にする社会制度であることが暗示されている。

砦に示される社会制度の特徴は、William Henry 砦の司令官 Munro 大佐を通して具体的に描かれている。Munro が砦の司令官になることができたのは、家柄と関係している。彼は、自分の家系を“ancient and honourable” (159) という。実際、Munro 家は、“the order for dignity and antiquity” (157) である“The Thistle” (157) 勲章を与えられた先祖を持つ名門なのである。彼は、スコットランド屈指の貴族の家柄の生まれなのである。砦の中では、貴族が重要な役割を果たしているのである。実際、Munro は、William Henry 砦の中で絶対的な権限をもっている。彼は、法を定め違反者を罰する権限をもっているのである。かつて Munro に仕えたことがある Magua は、“The old chief” (103) の Munro について娘に次のように話す。

The old chief at Horican, your father, was the great captain of our war party. He said to the Mohawks do this, and do that, and he was minded. He made a law, that if an Indian swallowed the fire-water, and came into the cloth wigwams of his warriors, it should not be forgotten. Magua foolishly opened his mouth, and the hot liquor led him into the cabin of Munro. (103)

Magua は、Munro の定めた法に違反し厳しく罰せられたのである。貴族である Munro は、砦の中で絶対的な支配権をもっているのだ。砦の中にあるのは、貴族が支配権を持つ社会制度なのである。

しかし、砦の中に構築された貴族の支配体制は、William Henry 砦の陥落と同時に崩壊する。貴族制度の崩壊の原因は、砦の司令官の倫理的姿勢と関係している。悪の化身 Magua が、夕闇迫る頃、Edward 砦に Montcalm 麾下のフランス軍の侵攻を伝える情報をもたらしたことはすでに述べた。彼が砦の中に入ったことは、悪の化身 Magua が砦を支配し始めたことを示している。実際、Edward 砦の司令官 Webb 将軍は、フランス軍の倍近い兵を指揮しているにもかかわらず恐怖心で縮み上がり戦意を喪失している。そればかりか、彼は、援軍を要請した Munro 大佐に援軍を送らず降伏を進める手紙を送り付け

る。Munro 大佐は、将軍の手紙を読んで “The man has betrayed me !” (164) と非難する。彼は、自分の身の安全しか考えない上官によって見殺しにされるのだ。Edward 砦の司令官 Webb 将軍は、悪の化身 Magua に蝕まれ倫理的に荒廃しているのだ。貴族制度崩壊の原因は、支配階級である砦の司令官の倫理的腐敗にあるのだ。

貴族制度崩壊の原因は、フランス軍司令官 Montcalm の倫理的姿勢を通してさらに強調されている。Duncan Heyward が降伏条件を取り決めるためにフランス軍の陣地に行くとき司令官 Montcalm を取り巻くインディアンの中に “the malignant countenance of Magua” (153) を見つける。悪の化身 Magua は、Montcalm にびたりと寄り添っている。彼が、Webb 将軍と同様に倫理的に墮落していることを暗示する場面である。実際、Montcalm は、通訳が要らないくらい英語がうまいのだけれども英語が分からない振りをしそばで交わされる Munro 大佐と Duncan の話を盗み聞く。その上、彼は、Munro に名誉ある撤退を約束するが、Huron 族による虐殺が始まるとそれを止めずなすがままにさせている。Montcalm は、目的のため手段を選ばないのだ。支配階級である貴族たちの倫理的腐敗が、貴族制度を崩壊させたのである。

砦に続いて倫理的腐敗を隠す闇に覆われた舞台に現れるのは、Duncan Heyward である。彼は、第 1 章半ばから描かれている “another departure” (16) を導いてゆくのである。この出発は、物語を展開する上で重要であるだけでなく、作品のテーマを支える重要な意味をも与えられている。この出発に与えられた意味は、それに加わっている Cora と Alice Munro 姉妹そして彼等を護衛する Duncan を通して示されている。Cora と Alice は、William Henry 砦の司令官をしている父親に会いに行こうとしているのだ。彼等は、父親との再会を願って道中の危険を承知の上で旅に出ようとしているのだ。彼等は、幸福の追求を旅の目的にしているのである。彼等を Edward 砦から William Henry 砦まで護衛する任務を与えられているのが、Duncan なのである。彼の任務は、道中の危険から Cora と Alice の命や自由を守り、父親と合わせてやることなのだ。彼の旅の目的は、彼等の生命と自由を守り幸福の追求を実現させることなのである。生命・自由そして幸福の追求は、Thomas Jefferson が独立宣言書の中で一定の奪いがたい天賦の権利であると述べたものである。Edward 砦から大森林地帯に踏み出して行く Duncan の旅は、砦に象徴的に示された貴族制度を離れて民主主義の実現を目指したもののなのである。

Duncan の担う民主主義は、Duncan の特徴を通して具体的に描かれている。Duncan は、アメリカ植民地の義勇軍である “the Royal Americans” (38) の “major” (38) をしている。彼は、年若くして少佐になったのだ。それには、彼の経済力と知性が関係している。そのことは、Duncan についての Natty Bumppo の言葉に示されている。Natty Bumppo は、Duncan 本人を前にしていることは知らずに次の様にいう。

Yes, yes, I have heard that a young gentleman of vast riches, from one of the provinces far south, has gotten the place. He is over young, too, to hold such rank, and to be put above men whose heads are beginning to bleach; and yet they say he is a soldier in his knowledge, and a gallant gentleman ! (38)

Duncan は、アメリカ南部の出身なのである。しかも、彼は、経済的に豊かな階層に属している。その上、彼は、知識人なのである。彼は、経済的・知的に恵まれているエリートなのである。このようなエリートが、Duncan の民主々義の担い手なのである。

Duncan の担う民主々義の特徴は、Duncan と Alice の係わりを通してさらに描かれている。Alice は、“her dazzling complexion, fair golden hair, and bright blue eyes” (18) をした娘として描かれている。彼女は、白人の父 Munro と白人の母との間に生まれた娘なのである。彼女の容貌は、人種の特徴を表しているだけではない。それは、象徴的な意味も与えられている。白人としての彼女の特徴は、悪を知らない純真無垢な娘であることを象徴的に示している。彼女は、自然や人間の中に悪が存在することを信じることができない博愛主義者なのである。その上、Alice は、合理的精神の持ち主でもある。彼女は、キリスト教の伝道に熱心な賛美歌教師 David Gamut を“a disciple of Apollo” (24) と呼んでいる。さらに、彼女は、メシヤとして描かれた Uncas の完璧な肉体をギリシャ彫刻を觀賞するように眺めている。Cooper は、Uncas を眺めている Alice を次のように描写している。

The ingenuous Alice gazed at his free air and proud carriage, as she would have looked upon some precious relic of the Grecian chisel, to which life had been imparted, by the intervention of a miracle. (53)

Alice は、Uncas を生きたギリシャ彫刻とみなして眺めている。彼女は、David と Uncas を聖書的なイメージで捕らえるのではなくギリシャ的なイメージで捕らえている。古代ギリシャは、合理主義の発祥の地であると言われている。David と Uncas をギリシャ的なイメージで捕らえる Alice は、合理主義者なのである。このような Alice を愛する Duncan は、彼女と同じ考え方をしているのだ。彼も自然や人間の中に悪の存在を信じられない合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰の持ち主なのである。Duncan の民主々義は、合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰を民主主義の精神的支柱としているのである。

しかし、Duncan の民主々義は、行き詰まるのである。それは、Duncan の導く旅の挫折で示されている。Duncan 達は、目的地 William Henry 砦に夕方までに着く予定で Edward 砦を出発したのだ。ところが、彼等は、William Henry 砦に着いてもよさそうな頃合いになっているにもかかわらず目的地に着かない。彼等は、一層暗くなった森の中をさまよっているのだ。そればかりか、彼等は、道案内を任せていた Magua に暗い森の中に置き去りにされてしまうのである。その結果、Duncan は、Cora と Alice を護衛する任務を果たせず途方にくれてしまうのである。実際、Duncan は、暗い森の中であった Natty Bumppo に “desert me not, for God’s sake! remain to defend those I escort, and freely name your own reward!” (45) と助けを求めている。Duncan は、Cora と Alice の生命と自由を守り、幸福の追求を実現させることができないのである。Duncan の民主々義は、旅び半ばにして挫折したのである。

Duncan の民主々義が挫折した原因は、彼の悪の化身 Magua に対する姿勢にみられる。Duncan は、合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰の信奉者であることはすでに述べ

た。彼は、自然や人間の中に悪が存在することを信じられないのである。このような Duncan は、Magua の象徴性を深く理解できないのである。実際、彼が Magua とのやりとりから引き出す結論は、Magua の本質をついたものではないのである。Duncan が Cora に与えた忠告は、彼の Magua に対するとらえ方をよく示している。Duncan は、Cora に次の様にいう。

You understand the nature of an Indian's wishes. . . and must be prodigal of your offers of powder and blankets. Ardent spirits are, however, the most prized by such as he; nor would it be amiss to add some boon from your own hand, with that grace you so well know how to practice. (101-102)

Duncan は、Magua を貪欲なインディアンと考えているのだ。彼は、Magua を悪の化身と理解できないのである。Duncan の民主主義が挫折した原因は、最後まで彼が合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰の枠組を脱却できなかったからなのである。<sup>7)</sup>

Duncan Heyward の次に倫理的腐敗を隠す闇に覆われた舞台上に登場するのは、Natty Bumppo である。第3章で登場する Natty Bumppo は、Duncan と対照的に描かれた人物である。Duncan は、アメリカ南部の生まれで、財産を持ち教養豊かな紳士である。そして、戦時中の今、彼は、少佐として部隊を指揮している。彼は、財産・教養・地位に恵まれたエリートなのだ。ところが、Natty Bumppo は、New York 植民地の生まれである。彼が持っているものと言えば、困難に耐えられる強い身体と獲物をとるための鉄砲だけである。彼は、Duncan のように経済的に恵まれていないのである。しかも、Natty Bumppo は、まともな教育を受けたこともない一介の猟師に過ぎない。そして、戦時中の今、イギリス軍の斥候として働いている。彼は、下級の一兵卒なのである。Duncan と対照的に、Natty Bumppo は、財産・教養・地位に関するかぎり何ひとつ誇り得るものを持たないのである。彼は、大衆の一人に過ぎないのである。このように描かれた Natty Bumppo のここでの登場は、作品のテーマと密接に結び付いている。Natty Bumppo の登場は、民主主義の担い手が地域的にアメリカ南部から北部の New York に移っただけでなく担い手がエリートから大衆へと変わったことを暗示しているのである。

Natty Bumppo は、民主主義の担い手なのである。第5章の Duncan と Natty Bumppo の対話に注目してみる。Magua に置き去りにされた Duncan は、Natty Bumppo に助けを求めていたことはすでに述べた。Duncan のこの求めに対して、Natty Bumppo は、一緒に行動している Mohican 族と相談した上で次のように答えている。

These Mohicans and I will do what man's thoughts can invent, to keep such flowers, which, though so sweet, were never made for the wilderness, from harm, and that without hope of any other recompense but such as God always gives to upright dealings. (46)

Natty Bumppo は、Cora と Alice を美しい花に例えている。彼は、この美しい花を Mohican 族と力を合わせて守るというのだ。彼は、Cora と Alice の生命と自由を守り彼等の幸福の追求を実現させる努力をすると決意を述べているのだ。Duncan と Natty Bumppo

の対話は、南部のエリートに代わって New York の大衆の一人である Natty Bumppo が民主々義の担い手として台頭したことを物語っているのである。

Natty Bumppo の民主々義の特徴は、彼の Magua に対する姿勢に示されている。“small, quick, keen, and restless” (30) と描かれた目をしている Natty Bumppo は、悪の跳梁する闇の中で倫理的善・悪を識別できるのだ。実際、“a look so dark and savage, that it might in itself excite fear” (39) と描写された Magua を見たとき、Natty Bumppo は、“I knew he was one of the cheats as soon as I laid eyes on him!” (39) という。彼は、直ちに、Magua を悪の化身と見抜くのだ。同時に、彼は、悪に触まれていることも自覚している。彼のこの自覚は、Duncan にいった言葉に示されている。Natty Bumppo は、William Henry 岩まで案内してくれと頼む Duncan に次の様にいう。

'Tis a natural impossibility! ... I wouldn't walk a mile in these woods after night gets into them, in company with that runner [Magua], for the best rifle in the colonies. They are full of outlying Iroquois, and your mongrel Mohawk knows where to find them too well, to be my companion. (39)

Natty Bumppo は、悪の化身 Magua の君臨する闇の中で人を導く能力を生まれながらに持ち合わせていないと告白している。Natty Bumppo の民主々義は、悪に触まれていることを自覚している担い手によって支えられているのである。

悪に触まれていることを自覚している民主々義の担い手 Natty Bumppo は、David Gamut や Duncan Heyward の信じるキリスト教信仰に批判的なのである。David Gamut は、New England 出身の賛美歌教師なのである。彼の伝導するキリスト教は、敬虔な宗教感情と教義を支えとしているけれどもメシヤ理解を持たないのである。彼を支えるキリスト教信仰は、第一回目の「信仰復興運動」の時の信仰なのである。<sup>6)</sup> Duncan Heyward は、合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰をもっていた。このような Duncan は、メシヤを善意の人として理解している。彼のメシヤ理解は、一面的なのである。Natty Bumppo は、David が所構わず賛美歌を歌うのを聞くと Huron 族を引きつけるといって彼に文句をいう。彼は、また、Duncan が不寝番をすると提案するとそれを断っている。彼は、Duncan の悪に対する洞察力のなさを見抜いているからなのだ。Natty Bumppo は、David や Duncan に体現されている形骸化したキリスト教信仰に満足できないのである。こうして、Natty Bumppo の民主々義が、新しい信仰理解に支えられていることが暗示されているのである。

民主々義を支える Natty Bumppo の新しい信仰は、彼の Uncas と Chingachogook に対する姿勢で示されている。Uncas は、メシヤなのである。<sup>7)</sup> 彼のメシヤ性は、物語の前半部で宗教的な意味を与えられた自然との係わりで描かれている。Uncas の完璧な身体・音楽的な声・躍動的な行動力は、宗教的な意味を与えられた自然の完全さ・美しさそして漲る生命力を表している。Uncas のメシヤ性は、物語の後半部で超自然的な枠組の中で描かれている。この枠組の核心部に Uncas の死が描かれている。しかも、彼の死に到る過程は、聖書のイエス・キリストの死に到る過程と重ね合わせて描かれている。Uncas の死



は、悪の呪縛から人間を解放し魂の負っている傷を癒し人間性を回復させるための死なのである。彼の死は、救いをもたらすのだ。Natty Bumppo は、宗教的な意味を与えられた自然に啓示を読み取るだけでなく超自然的な枠組の中に宗教的な真理を読み取ることができる人物なのである。このような Natty Bumppo は、Uncas のメシヤ性を理解するのだ。さらに、彼は、Uncas の死を通して Uncas の父 Chingachgook との絆を深めている。彼は、メシヤの父との和解を果たしているのである。彼は、救いを得たのである。<sup>(10)</sup> Natty Bumppo の民主々義は、救いを得た者を担い手にしているのだ。

救いを得た者を担い手としている Natty Bumppo の民主々義は、Natty Bumppo と Cora Munro との係わりを通してさらに示されている。Cora は、妹の Alice と対照的に “The tresses of this lady were shining and black, like the plumage of the raven.” (19) と描かれている。彼女は、白人の父 Munro と黒人の血を引く母との間に生まれた混血の娘である。しかし、彼女の黒髪は、彼女の人種の特徴を示しているだけでなく象徴的な意味も与えられている。彼女の黒髪は、生まれながらに悪の化身 Magua のため蝕まれていることを示している。彼女は、悪に蝕まれていることを自覚しているのだ。<sup>(11)</sup> Natty Bumppo も、やはり、悪に蝕まれていることを自覚している。Natty Bumppo と Cora は、共通の人間観を持っているのである。人間観を共有する Natty Bumppo は、白人と黒人という人種的違いや男と女という性別の違いを越えて Cora の意見に耳を傾ける。Cora は、彼女たちを守ろうと努力している Natty Bumppo と Mohican たちが Magua の率いる Huron 族に囲まれ絶体絶命の窮地に陥ったとき、川に飛び込んで逃げるように提案する。Natty Bumppo は、彼女の提案を受け入れる。そして、彼は、川に飛び込む前に Cora に次の様にいう。

Wisdom is sometimes given to the young, as well as to the old . . . and what you have spoken is wise, not to call it by a better word. (79)

Natty Bumppo は、Cora の知恵を高く評価している。Natty Bumppo の民主々義は、人種的偏見や性別の違いに捕われないのである。

Natty Bumppo の民主々義は、Duncan の民主々義と明らかに対比されている。Duncan は、Magua の象徴性を深く理解できなかった。このような Duncan は、Cora の黒髪を見てもそこに深い象徴性を読み取ることができない。彼は、Cora の黒髪に人種的特徴を見るのだ。そして彼は、Cora を蔑むのだ。Duncan の民主々義は、黒人を受け入れない。彼の民主々義は、彼と Alice の関係にみられるように白人を中心にしている。Duncan と Alice の関係は、さらに、Duncan の民主々義における男女の役割をも示している。幼い Alice は、Duncan に常に依存している。Duncan の担う民主々義は、白人男性を担い手にしているのである。対照的に、Natty Bumppo の民主々義は、Natty Bumppo と Cora の関係に見てきたように白人男性に限定されていない。彼の民主々義は、人種的にも性別的にも異なる人を担い手にしようとしている。Natty Bumppo の民主々義は、Duncan の民主々義を一層民主化したものなのである。

Natty Bumppo の民主々義は、Magua の影響力に対して歯止めを掛けることになる。

悪の化身 Magua は、弁舌巧みなデマゴグでもあるのだ。“The orator, or the politician” (283) と描かれている Magua は、自分の演説を聴衆の顔色を伺いながら進めて行くことのできる男なのである。聴衆の心を掌握するために彼は、時には、民族感情をくすぐったり、時には、人種的偏見をおおったりする。実際、彼は、Delaware 族を味方にしようとして人種偏見を利用する。彼は、Delaware 族を前に次のように語る。

The Spirit that made men, coloured them differently. . . Some are blacker than the sluggish bear. These he said should be slaves; and he ordered them to work for ever, like the beaver. You may hear them groan, when the south wind blows, louder than the lowing buffaloes, along the shores of the great salt lake, where the big canoes come and go with them in droves. Some he made with faces paler than the ermine of the forest; and these he ordered to be traders; dogs to their women, and wolves to their slaves. . . Some the Great Spirit made with skins brighter and redder than your sun. . . and these did he fashion to his mind. He gave them this island as he made it, covered with trees, and filled with game. (300-301)

Magua は、白人や黒人よりインディアンが神の心にかなうものだという。Magua のこの偏見は、白人がインディアンや黒人に抱いている偏見を裏返したものである。悪に触まれていることを自覚している Natty Bumppo は、彼の Cora に対する姿勢にみられたように黒人や女性の意見に耳を傾けている。悪に触まれていることを自覚している Natty Bumppo は、かえって多様な人の知恵を借りようとしている。こうして、Natty Bumppo の民主々義は、デマゴグとしての Magua がつけ込む隙きを与えないのである。Henry Nash Smith は、Natty Bumppo を “the character of Leatherstocking is by far the most important symbol of the national experience of adventure across the continent.”<sup>(12)</sup> という。彼は、Natty Bumppo を西部開拓の国民的経験の象徴と見ている。しかし、闇に覆われた舞台の中で Natty Bumppo を捕らえ直してみると、Natty Bumppo は、新しいキリスト教信仰を基盤にして民主々義の活性化をした人物と解釈することができるのである。*The Last of the Mohicans* は、Natty Bumppo 像を通して政治と宗教の係わりを作品のテーマにしているのである。

*The Last of the Mohicans* は、二つの時間の枠組で構成されている。一つは、救済史の枠組である。その時間の枠組の中に、もう一つの時間の枠組が埋め込まれている。そのもう一つの時間の枠組は、アメリカ史の枠組である。この二つの時間の枠組の接点にるのが、Natty Bumppo である。Natty Bumppo は、救済史の中で見ると新しいキリスト教信仰を求めて救いを得た宗教的な人間である。彼は、アメリカ史の中で見ると新しい民主々義の担い手である。Natty Bumppo 一人の中に宗教的人間と民主々義の担い手が結実しているのである。Cooper がこのような Natty Bumppo を描いた理由は、民主々義の活性化のためには民主々義を支えるキリスト教信仰の復興が必要であることを強調したかったからであろう。

注

- (1) Yvor Winters *In Defense of Reason* (Athens: Ohio University Press, 1987) 186
- (2) James Fenimore Cooper *The Last of the Mohicans; A Narrative of 1755* (Albany: State University of New York Press, 1983) 本論文中的作品からの引用は、全てこの版による。なお、( ) ないの数字は、そのページを示す。
- (3) Howard Mumford Jones *History and The Contemporary: Essays in Nineteenth-Century Literature* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1964) 72
- (4) Donald A. Ringe *The Pictorial Mode: Space and Time in the Arts of Bryant, Irving and Cooper* (Lexington: The University of Kentucky, 1971) 41
- (5) Thomas Philbrick "The Last of the Mohicans and the Sounds of Discord" *American Literature*, 43 (1971) 31
- (6) James Franklin Beard "Afterword," *The Last of the Mohicans* (New York: New American Library, 1962) 424
- (7) 拙論「Duncan Heyward の挫折」大阪女学院短期大学紀要第24・25号 (1995) 99-108
- (8) 拙論「偽キリスト David Gamut」大阪女学院短期大学紀要第24・25号 (1995) 89-98
- (9) 拙論「時間の中心 Uncas—クーパーの描いたメシヤ像—」大阪女学院短期大学紀要第19号 (1988) 87-103
- (10) 拙論「Glenn's の彼方へ——Cooper の救い——」大阪女学院短期大学紀要第24・25号 (1995) 109-120
- (11) 拙論「Cora Munro の死の意味」大阪女学院短期大学紀要第24・25号 (1995) 77-87
- (12) Henry Nash Smith *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth* (Cambridge: Harvard University Press, 1975) 61